

糸結びテストによる被服指導の研究事例について

荻野千鶴子・岩城久美子

Thread Knotting and Japanese Dress Making

CHIZUKO OGINO and KUMIKO IWAKI

緒 言

被服技能と関連性のある糸結びテストについては、太田氏らにより、被服製作技能との関連性および指先の器用さの測定などを、国立附属学校を中心に多くの研究がなされているが、今回は愛知・三重両県下の小学校・中学校・高等学校および各種学校など、対象の範囲を広くして糸結びテストを実施し、被服技能の発達傾向や技能に関係の深い要因などにつき研究を行ったので報告する。

方法および対象

テスト方法は太田らによる。

テストを行なった対象は表1に示す通りである。

即ち小学校・中学校・高等学校・

大学および被服関係各種学校、一般婦人の計13グループを、できる限り幅広い地域から選出し、男子119名、女子1368名である。時期は昭和50年9月から12月までの午前10時から午後3時までの間に行なった。

表1 糸結びテスト実施対策

所在地	対象	学校数	被験者			備考
			男 _人	女 _人	計 _人	
三 重 県	小	2	16	21	37	津市に隣接する半農村
			33	35	68	桑名市の団地
	中	4	18	32	50	津市内
			0	209	209	津市周辺
			34	116	150	海浜部僻地
高	3		64	64	四日市市内	
			46	46	海浜郡僻地	
			268	268	名古屋市内	
大	1		253	253		
		各種	2		79	79
	124			124		
愛 知 県	一般	1		55	55	安城市および周辺
			計	13	119	1368

結果および考察

1. 年令別結び目数

結び目数を学年別にまとめると図1の通りである。まず女子では、小学校5年は13.8目、大学3年は22.9目、一般婦人は29.7目と年令が進むに従いほぼ順調に伸びを示している。しかしこの中で高校1年および大学1年がやや下降を示しているが、これらは何れも1クラスの平均値であり、他よりやや学力低く、被服に対しての意欲に欠けるための結

果ではないかと思われる。

以上の結果から小学校6年の結び目数を基にして学校種別の伸びをみると、表2に示すように、小学校から中学校3年までの伸びが最も大きい。この結果から中学3年までに指先を使う技能即ち被服技能の基礎的なものは、初歩的段階において顕著に発達するのでこの間の技能教育の重要性を示していると考えられる。

男子においては、小学校5年から中学校2年までのわずか4段階のテストにすぎないが、女子と同じく年齢が進むに従って

わずかながら上達している。今回は被験者が少数に終わったが、広くテストを行なうとその差が明確にでてくるものと思われる。男女ともに学年が進むに従い作業の速度を増す状態は太田らと同じ結果が得られた。

2. 専攻別による差

つぎに同年令の専攻別グループによる差について検討を行なった。

1) A高校3年家政科と被服科生徒の糸結び結果は、被服科の結び目数の平均値は18.3目で標準偏差値は3.42であり、家政科は標準偏差値5.83であるが平均値は21.3目で、入学以来被服製作の履習単位は少ないにもかかわらず被服科よりすぐれている。(図2 I) またB高校2年M科とC科を比較すると、M科の結び目平均値は20目であり、C科より約3目多く、最高結び目は40目で相当差がある。(図2 II) これら2校の優位な方は何れも高校入試の成績が上位のクラスである。

この結果からみると、作業の速度は指先の器用さだけでなく、知能面もある程度加味されるように思われる。

2) 大学3年に相当する専攻別6グループの糸結び結果は図3に示す通りである。目的を異にする3校即ち大学1校および各種学校2校の、専攻別グループにおける10分間隔で連続2回行なった糸結び結果は何れも2回目が多くなっている。結び目数の最も多いのは

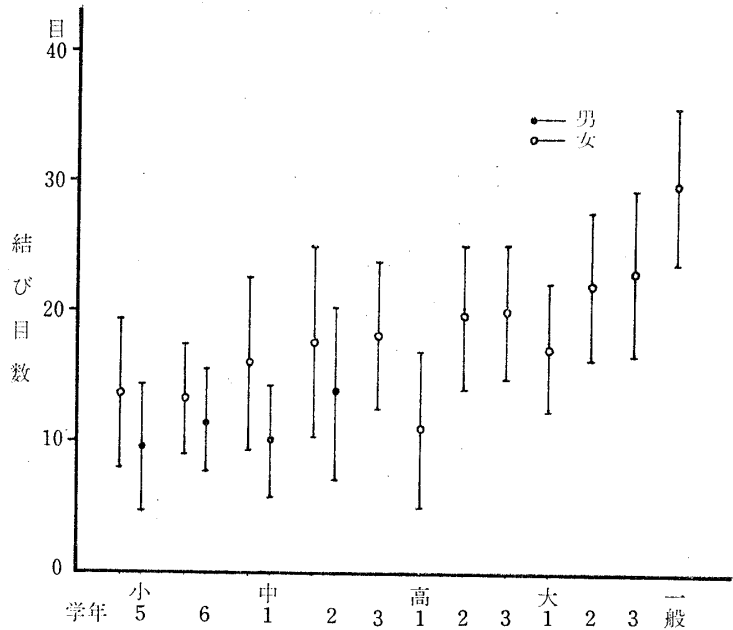


図1 5分間に結べる数の学年別平均値および範囲

表2 学校種別結び目状況

学年	項目	結び目数平均	指数
小学5年		13.22	100
中学3年		18.19	138
高校3年		19.90	150.5
大学3年		22.85	172.8

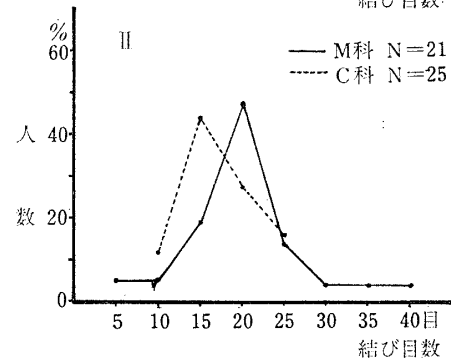
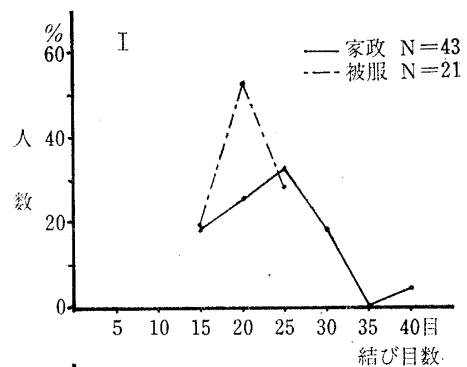


図2 同高校同学年専攻別結び目数分布曲線

各種学校Bであるが、これは特に実技を主にする学校であり、入学以来3年間の技能熟練の結果と思われる。またその中でも平素指先の仕事の多い和裁専攻グループが洋裁専攻より1・2回とも最高を示している。これに対し各種学校Aは、家政科短大卒の生徒が大半を占めており、1年足らずの技術習得のため低い結果が出たものと思われる。

3) 一般婦人55名についての職業別結び目数分布曲線は図4に示す通りである。結び目平均値、最高結び目数ともに最も優れているのは家事従事者であり、低いのは農業従事者であった。これは日常の生活に相当手先の仕事が多い家事従事者に比べ、農業従事者は仕事の性質上力仕事が多く、繊細な指先の仕事に不馴れであるからと考えられる。これについては高校3年ハンドボール選手が毎日の練習で腕を使うためか同傾向を示している。

一般婦人の年齢別についても調べたが、今回は被験者の数が少数であるため顕著な格差は現われなかったが、このテストの上達度合いの年齢的限界についても今後研究を進めたいと思う。

3. 練習回数による上達状態について

最初2~3回の練習後、第1回目の糸結びのみでは、結び方に対する既有的知識や技能により個人差も多く、またしそこないもあると考えられるので、第1回終了後10分の間隔をおいて2回目を行なった。その結果は図5のように中学3年のA校を除き他は全部上昇し、多いところは32%の上昇率である。5%の減少率を示したグループは1回目の結果とけた目が多く、2目回はこれをなくすため結び目を確認して作業を行なった結果であると考えられる。つぎに継続練習による変化を中

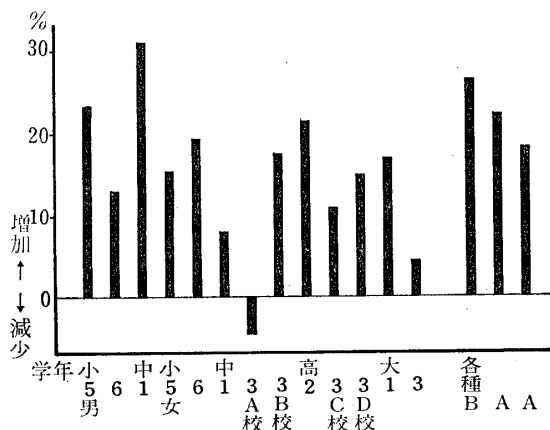


図5 2回目結び目数伸び率

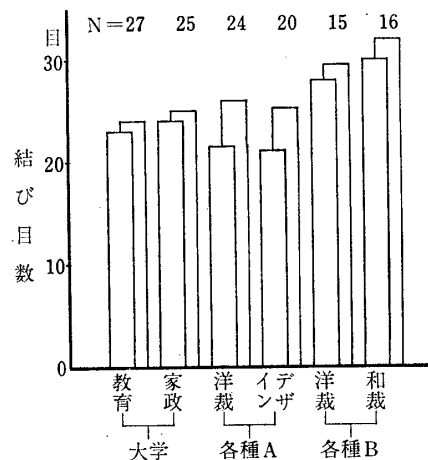


図3 同年令における専攻別比較

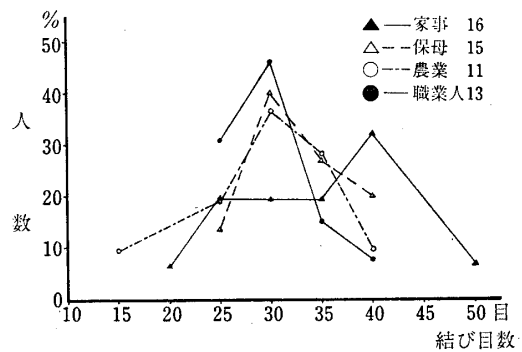


図4 一般婦人の職業別結び目数分布曲線

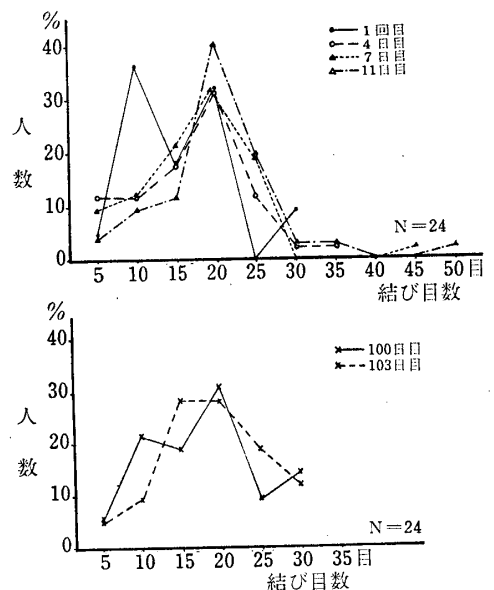


図6 テスト回数による結び目数分布曲線の変化

学1年女子について実験(図6)した。2週間に4回ほぼ同間隔でテストを行ない、その後3か月を経て再度テストを行なった結果は、1回目結び目数平均15.9目から20.9目まで順次上昇している。また最高結び目数も毎回延びている。しかし5回目は減少し平均値は2回目をやや上廻る程度になったが、さらに3日後6回目を行なったところ、4回目よりやや少ないが19.4目に上昇した。これにより一度身についた技能は、継続的に練習しなくて途中で中断しても最初にもどることはなく、相当の残存性があるといえる。このことから被服技能は、児童生徒の発達段階に応じて定着させておく必要があると思われる。

4. 結び目数と学業成績その他との関係

結び目数と学業成績の相関関係は図7に示す通りである。技術や家庭科の成績とは相当高い関連性がある。これにより結び目数と手指を動かす作業との関係は相当深いものと推察される。

また糸結びが手先の器用さだけでなく、知能との関係もみられたことを先に述べたが、義務教育における糸結びと成績・性格などについてしらべた。中学校3年生徒65名のうち、糸結び数の多いものから25%を上位群、低いものから順に25%を下位群として両群の比較を試みた結果は図8に示す通りである。上位群結び目数平均28目、知能偏差値55、5科目(国語・数学・社会・理科・英語)平均点69点に比し、下位群は結び目数平均17目で、知能偏差値・5教科成績ともに低い。また担任教師所見による性格をみると、上位群には積極性があり、明朗・まじめで気力があるものが多い。下位群は消極

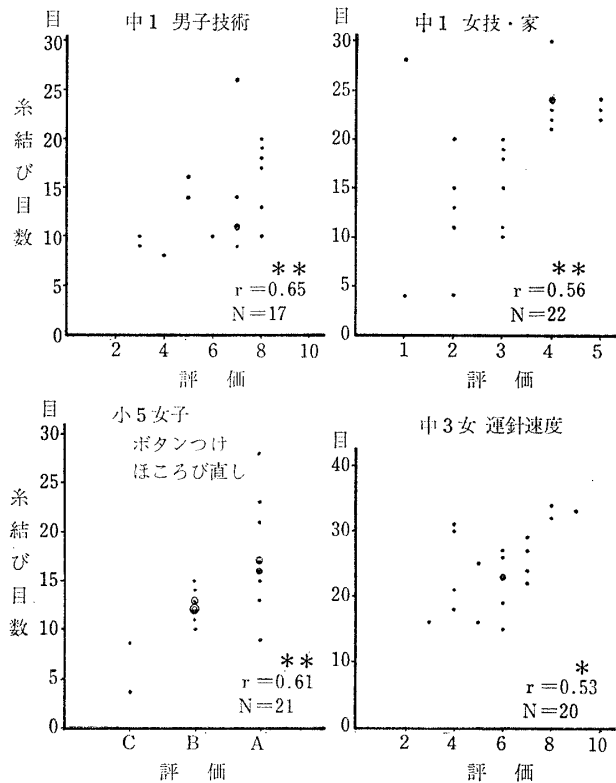


図7 結び目数と成績の関係

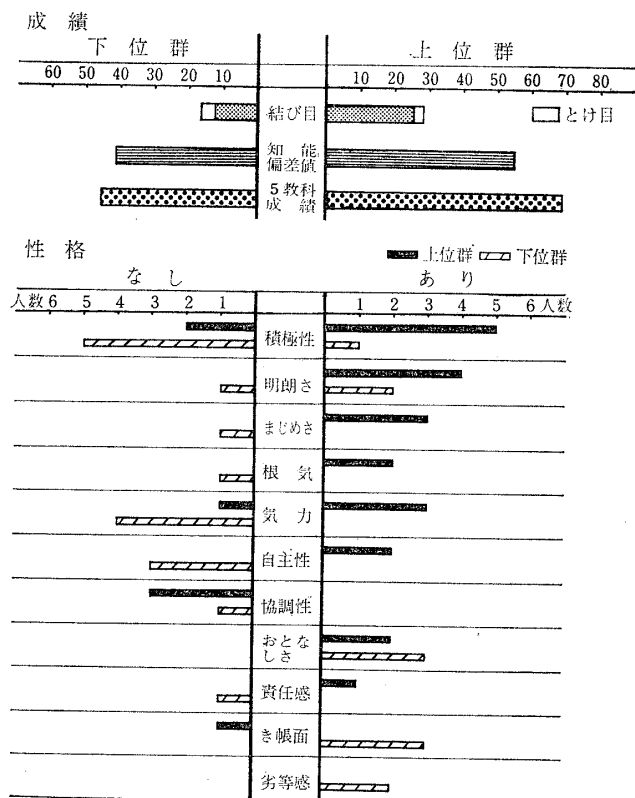


図8 中3女子糸結びと成績性格の関係

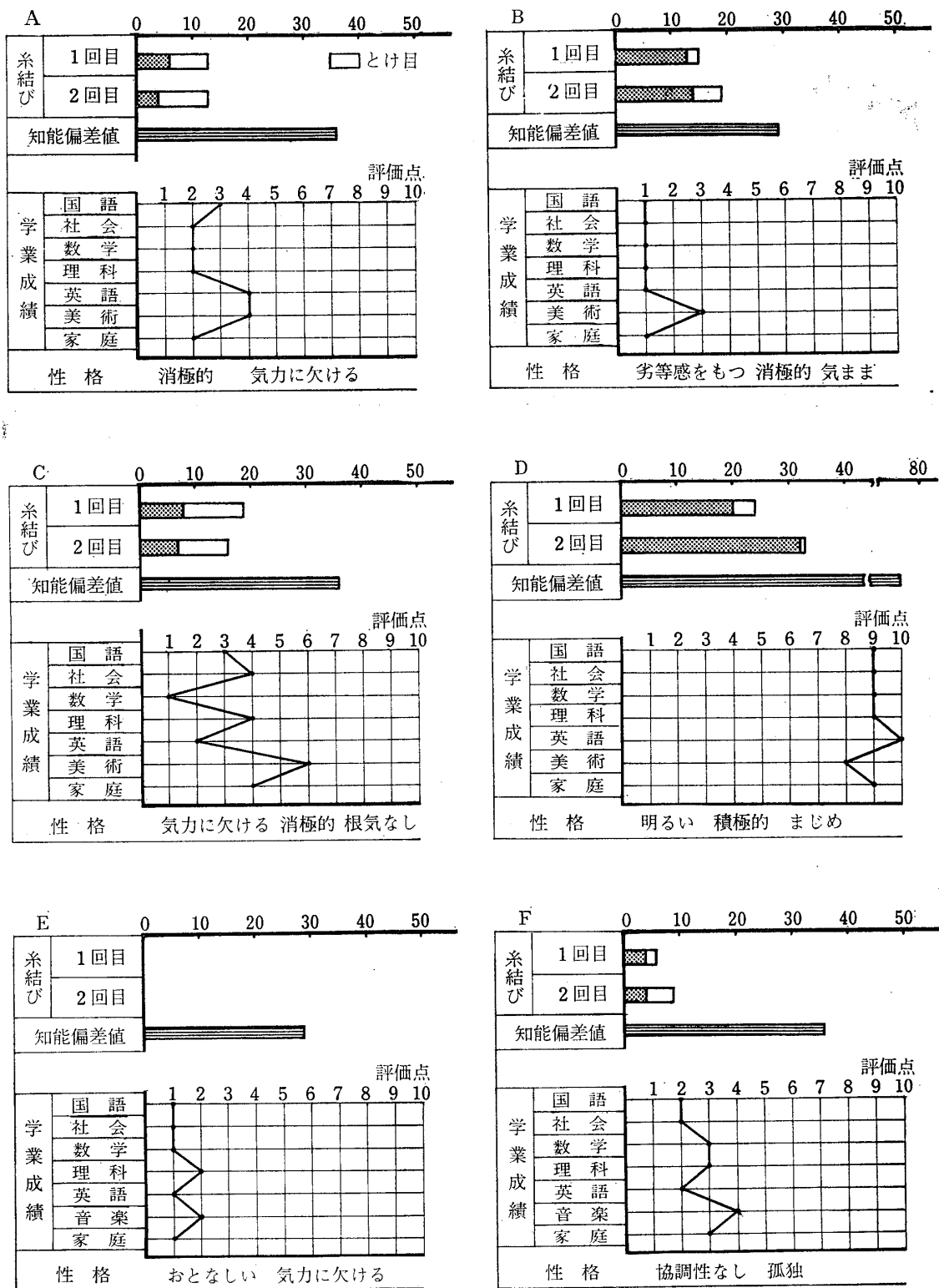


図9 中 3 女子 事例

的で気力なく、自主性に欠けるものが多い、またおとなしく、几帳面すぎるものが下位群にいるが、これらからも糸結びの遅い要因が考えられる。

以上の性格は中学1・2年においても同傾向であった。しかしなかに学業成績は最下位であ

るが、結び目数は毎回上位にある生徒をみると、日常施設に収容されており訓練の中で生活しているため目先がきき、生活態度もやや異っている。またこれと反対に学業成績・知能指数とも上位にあり、ピアノも堪能であるにもかかわらず結び目数の非常に低い生徒を徒みると、物事に用心深く、小心で過保護に育てられている。一般に祖母に育てられたり過保護の生徒は悪い結果が出ている。これらは生活環境が本人の性格づくりにも影響を与え、それが作業面にも現われているものと推察される。

つぎに個々の事例について図9に示した。何れも1回目と2回目の結び目数と知能偏差値および学業成績を示したが、Dは結び目数が1・2回目と順調に伸びて32目でクラスの中で上位を占めたが、知能偏差値は70、学業成績は平均9点(10点満点)であり、性格は明朗で積極性がある。これに比し同クラスのBは1・2回目ともに結び目数は15目前後で偏差値も低く成績も悪くクラスでの最下位である。性格もDとは対照的である。Eは1・2回目とも結び目数は0であり成績も悪い。これらの事例から技能は知能・性格などと相当関連性がある結果がみられるが、これらの点については今後多くの事例にあたり一層研究を深めたい。

以上の結果から被服技能の熟練は人間の性格を形づくる一助にもなり、また思考力を養成するものであると云われていることがうなづかれる。

要 約

以上をまとめると

1. 年齢による差、男女の差、専攻別差が比較的明確に現われた。
2. 同一高校において入試の成績差は糸結びの平均値にも現われた。即ち成績上位のクラスが糸結びの数値もよい。
3. 被服技能は練習を重ねることにより伸びを示し、体の筋肉や手指の運動に訴える作業効果の残留性が相当あることが認められた。そして必ずしも連日つとめて練習する必要性のないことや、教育上における実習の重要性の一端が伺えた。
4. 糸結びは誰にもできる簡単な作業であるが、結び目数0とか3目結んで全部とけたものもあり、これらは何れもクラスの劣等生であり、性格も気力に欠け消極的である。
5. 被服技能は指先の器用さだけでなく、初歩の段階では学業成績や性格・環境など関係因子のあることがわかったので、今後技能の特に劣っている児童生徒の伸びの可能性を見出し、能力の糸口発見の研究を進めたい。

最後に本研究に対し終始御懇切な御指導を賜りました奈良女子大学家政学部の花岡利昌教授、御助言を賜った島根教育大学教育学部の太田昌子助教授ならびに本研究に御協力下さいました方々に深甚の謝意を表します。

参 考 文 献

- 1) 藤沢キミエ, 太田昌子: 家政学研究, 6, 14~20 (1959)
- 2) 太田昌子, 藤沢キミエ: 家政学研究, 7, 44~49 (1960)
- 3) 太田昌子, 藤沢キミエ他: 家政学研究, 8, 38~41 (1961)
- 4) 太田昌子, 藤沢キミエ他: 家政学研究, 9, 22~27 (1962)
- 5) 太田昌子, 藤沢キミエ: 家政学研究, 12, 4~10, 12~15 (1965)